

『恵美酒宮天満神社秋季祭礼』をたずねて

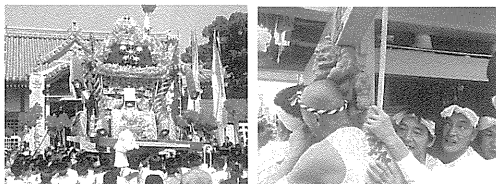
祭礼日：10月8日・9日 神社所在地：姫路市飾磨区恵美酒



本宮宮入後の屋台練り合わせ

恵美酒宮天満神社の秋季祭礼には、氏子地域である東堀、都倉、御幸町、栄町、玉地、清水、北細江、小瀬の8か町から屋台が練り出され、屋台脚回りの泥台だけで屋台を練る「台場練り」が有名である。秋季祭礼は10月8日・9日に行われ、両日も屋台の宮入りがあり、台場練りや2台以上の屋台を合わせて練る練り合わせが行われる。本宮の神事は、当番町によって奉仕される神輿が神社前の浜先まで御旅を行う。当番町は輪番制で、8年に一度、都倉町が当番の年は、神輿と屋台が氏子全町を巡行する本神事が行われる。

台場練り 恵美酒宮天満神社の秋季祭礼の見どころである「台場練り」は、屋台を差し上げたときに、屋台脚回りの台場（泥台）に24人の練り子が入り、拍子木と掛け声に合わせて、本棒、脇棒、門の練り子が一斉に手を離し、台場の練り子だけで屋台を練る技である。遠くから見ると、屋台が宙に浮いているように見え、台場の練り子と受け手の信頼関係がなければ決して出来ないといわれる。長時間にわたる屋台練りも「台場練り」を成功させるために培われた練り子の結束力が反映されている。



屋台の特徴 台場練りを行う恵美酒宮天満神社の屋台は、泥台脚柱の外側に角と呼ばれる突起がある。角は、泥台下貫のほぞを脚柱に貫通させ、脚柱の外側に補強材を取り付けて造られている。台場練りは、泥台の下貫に4人ずつ4面で16人が入り、角に入る8人と合わせて計24人で行われる。



【祭礼の概要】

10月8日（宵宮） 宵宮は、各町氏子青年会の代表が恵美酒宮天満神社に集まって御祓いを受け、祭礼の安全を祈願する安全祈願祭から始まる。各町を練り出した屋台は町練りを行い、昼過ぎから恵美酒宮天満神社に宮入りする。宵宮の宮入り順は決まっておらず、古くから入り勝ちとなっている。宮入りした屋台は鳥居の下や拝殿前で台場練りを行い、浜先、境内で練り合わせが行われる。夕刻になると屋台の宮出しが行われ、宵宮行事は終了する。

10月9日（本宮） 早朝より練り出された各町の屋台は、山陽電鉄飾磨駅北側の道路に集合し、到着順に練り合わせや台場練りを行う。駅北の道路を2台の屋台が練り合わせながら進む様子は壮観で本宮最初の見どころである。全町の屋台が揃うと、当番町の屋台を先頭に恵美酒宮天満神社に向けて出発する。昼前から屋台の宮入りが始まり、鳥居下で差し上げた屋台は台場練りを行い、浜先や境内で練り合わせが行われる。全町の屋台が境内の定位置に据えられると神事が行われ、神輿が出御すると、露払いを務める東堀屋台を先頭に、浜先の御旅所に向けて神幸渡御が行われる。浜先での神事が終わり、神輿が拝殿に還御すると屋台の練り上げが始まり、各町屋台による練り合わせが次々と練り広げられる。陽も沈み、練り合わせを終えた屋台は、東堀を先頭に浜先を退出し、参道入り口の飾磨街道四辻で差し別れを行って各町に帰る。途中、都倉と清水の屋台は旧ジャスコ駐車場で当年最後の練り合わせを行い、玉地の向島橋でも、玉地、栄町、北細江による練り合わせが行われ、祭りの終わりを迎える。

10月8日（宵宮）	10月9日（本宮）
午前中 各町屋台練り出し	9：30 飾磨駅北側道路集合
13：00 宮入り	10：00 屋台出発
14：00 神事	11：30 宮入り
15：30 宮出し	14：00 神事
	16：30 屋台練り上げ

祭礼行事予定時刻



屋台練り合わせ

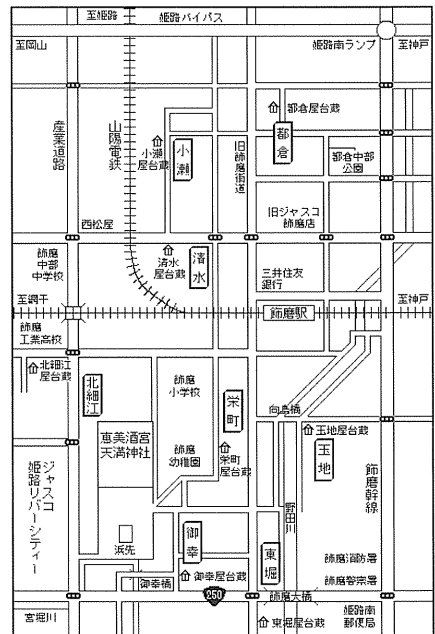


神輿出御



神輿

本神事 本神事とは都倉が当番の年に行われる秋季祭礼のことで、本宮の行事が通例の祭礼と異なり、各町の屋台は、山電飾磨駅北側の道路に集合することなく、早朝から恵美酒宮天満神社に宮入りし、神輿と共に氏子全町を巡行する。本神事は、神輿が再興された正徳4年（1714）に、大坂で製作された神輿が、東堀の浜から陸揚げされ、氏子全町を巡行したことに由来し、御旅所を持つ都倉が当番の年に、この行事が行われることになっている。次の本神事は平成21年に行われる。



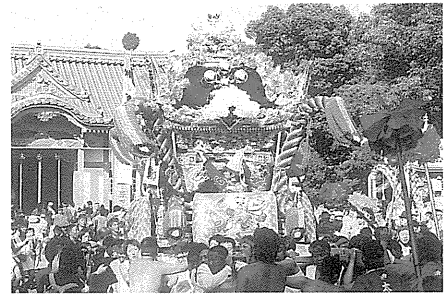
恵美酒宮天満神社氏子町略図

【屋台紹介】

東堀 東堀は恵美酒宮天満神社の宮元として屋台紋が他町とは異なる違鎌紋で、露払いの先陣を努める役割がある。恵美酒宮天満神社に伝わる違鎌紋は、菅原道真公がお通りになる道の草を住人が鎌で刈ったという伝承に由来している。現在の屋台は平成8年に新調され、同10年に鍔金具装飾と漆塗りが完成した。擬宝珠、梅鉢の紋章は独特の素上げメッキで仕上げられ、艶消しをした渋みのある色合いが特徴である。狭間の場面は「菅原道真公遊歩の場」「桜井駅楠公父子訣別の場」「安宅の関」「本能寺の変」である。幕の図柄は「神功皇后三韓遠征」、高欄掛の図柄は「一ノ谷の合戦」である。

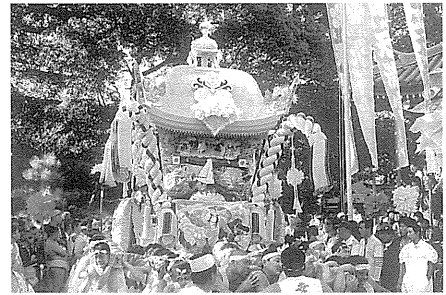


都倉 都倉は古来から飾磨街道を中心に発展し、国府の穀物を貯蔵する倉があり、都の倉であることからこの地名が起ったといわれる。都倉町の屋台は擬宝珠の鯨と重量感のあるその姿に特徴がある。現在の屋台は平成9年に新調され、同11年に漆塗りと鍔金具、露盤を新調同12年に狭間を新調した。露盤、狭間の彫刻は二代目・中山龍雲師の作品で、狭間の場面は「天の岩屋戸」「佐久間玄蕃秀吉本陣乗込の場」「源平布引滝四段目小桜責め」

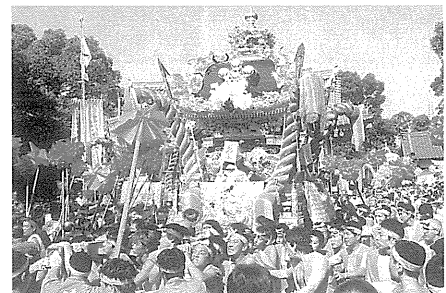


「曾我五郎時致大磯行の場」である。幕の図柄は「龍虎」、高欄掛は「武田信玄」と「上杉謙信」の川中島の合戦、「那須与一扇的」と「義経八艘跳び」の源平合戦である。

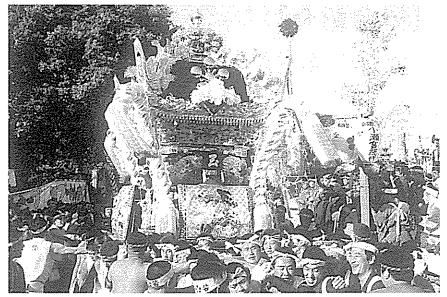
御幸 現在の屋台は平成14年に新調され、前後の屋台紋が従来の梅鉢から恵比須神の「蔓柏」に変更された。他地区にはない工夫が凝らされた屋台で、脇棒受けの象嵌細工や、泥台の角に取り付けた「力神」は、台場練りの迫力をより一層引き立たせている。天井も従来の格天井から龍を配した天蓋彫刻となり、平成15年に新調された狭間には、源平合戦の名場面から「石橋山の合戦」「一ノ谷の合戦」「壇ノ浦の合戦」「衣川の合戦」の四場面が彫刻され、材質も入手困難といわれる神代檜を用い、他地区にはない特色を出している。彫刻一式は富山県南砺市井波の三代目・南部白雲師によって手掛けられた。



栄町 栄町は、天正8年の英賀城没落の時、その城下に住んでいた人々がこの地に移り住んで英加町をつくり、後に上下二町に分かれ南側の下英加町が現在の栄町である。栄町に屋台が出来たのは嘉永年間といわれ、当時は神輿のお先祓いを務めていたという。昭和30年代に屋台の練り出しが途絶え、この後は子供屋台で祭りに参加していた。現在の屋台は平成8年に復活新調され、同10年に鍔金具装飾と漆塗りが完成した。狭間の場面は「鶴岡八幡宮放生会」「天神記」「巴御前の勇戦」「本能寺の変」である。幕の図柄は「龍虎」、高欄掛には龍、虎、鯉、鷺の退治物が刺繍されている。



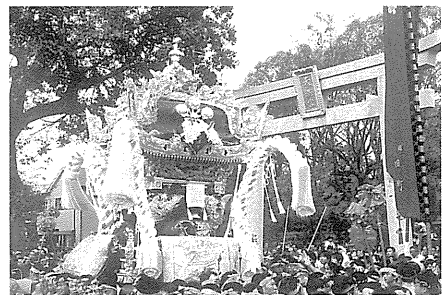
玉地 現在の屋台は平成4年に新調され、同6年に漆塗りと鍔金具、狭間が新調された。昇総才は他の屋台には見られない鳳凰を主体にした装飾が特徴である。露盤、狭間の彫刻は、姫路市土山の太西一生師の作品で、狭間の場面は「天の岩屋戸」「巴御前の勇戦」「朝比奈三郎の勇戦」「名和長年後醍醐天皇御迎の場」である。幕の図柄は「龍虎」、高欄掛の図柄は「源頼政鶴退治」「加藤清正虎退治」「佐々木高綱」と「梶原景季」の宇治川の先陣争いである。大正6年まで「田町」と呼ばれていたため、幟の文字は「旧田町」と刺繍されている。



清水 飾磨薬師寺の名泉からこの地名が起った。大正年間に屋台を売却し、屋台練りが途絶えていたが、昭和47年に子供屋台を製作、同57年には二代目の子供屋台が新調された。現在の屋台は平成4年に新調、同6年に鍔装飾と漆塗りが完成した。伊達綱や幟は町の色である緑を基調にし、鍔金具と幕は水の神である龍で装飾された総才端鏡の「旧上英加町」は大正6年まで使われた旧地名である。露盤、狭間の彫刻師は京都の村上照男・照夫父子で、狭間の場面は「佐久間玄蕃秀吉本陣乗込の場」「源平布引滝四段目小桜責め」「村上義光錦旗奪還の場」「桜井駅楠公父子訣別の場」である。高欄掛は「川中島の合戦」である。



北細江 北細江は昭和53年から子供屋台で秋祭りに参加するようになり、平成3年に屋台を新調、同5年に鍔装飾と漆塗りが完成した。平成14年には、屋台蔵と公民館が新築され、町中の道路に提灯を吊す大道輿と幟を新調した。平成18年は、5月に行われる「ザ祭り屋台in姫路」への参加に向けて屋台を新調することになった。



小瀬 小瀬は昭和60年に恵美酒宮天満神社に氏子入りし、昭和61年に子供屋台を新調して秋祭りに参加するようになった。平成4年には屋台に漆が塗られ、同10年には幕、高欄掛、伊達綱が新調された。



氏子8か町のうち、都倉、玉地、清水、北細江は、町名を刺繍した幟が屋台を先導し、各地区に伝わる伊勢音頭に合わせて幟練りが行われる。幟と屋台が一体になって行われる宮入りや練り合わせ、町練りなども祭りの見どころである。